

渋沢栄一に関する一考察 (1)

：儒教とサン・シモン主義

田 中 文 憲*

A Study on Eiichi Shibusawa (1)

：Confucianism and Saint-Simonism

Fuminori TANAKA

要 旨

本稿の目的は、生涯に 500 以上の企業、600 以上の慈善団体等の設立と運営に関与し、「日本資本主義の父」と呼ばれている渋沢栄一の発想と行動を支えたものが何であったか、儒教とサン・シモン主義を手掛りに究明することにある。

分析の結果、渋沢は、終生天皇を中心とする豊かで強い日本を作るために自ら奉仕しようとしたナショナリストであり、論語を含む儒教を現実主義的に解釈して生涯の指針としたプラグマティストであることがわかった。また、渋沢は、「論語と算盤」を掲げて、経済と道徳を一致させることを主張するなど、「渋沢イズム」というべき独特の思想の持ち主であることがわかった。

渋沢の評価の高さは、実業家としては異例の子爵に叙されたことにも表われている。

キーワード：儒教、サン・シモン主義、ナショナリスト、プラグマティスト

I はじめに

日本は、周知のとおり江戸時代の約 260 年間その政治的安定と引換えに、経済、軍事などにおいて西欧列強に大きく遅れをとった。こうした太平の世は、ペリー艦隊の 4 隻の軍艦に象徴される西欧からの脅威によって危機にさらされたのである。こうした危機を前にして、日本は明治維新を機に、一気に西欧文明を取り入れ、これを梃子に前近代的な日本の政治、経済、社会制度などを近代化すなわち西欧化して列強に追いつき、日本を外からの脅威から守るべく梶を切った。

こうした時代の転換期に生き、生涯に実業家として 500 以上の企業、600 以上の慈善団体等の設立や運営に関わり、「日本資本主義の父」と呼ばれる人物がいる。¹⁾ 2024 年から新一万円札の肖像にも選ばれたこの人物こそ渋沢栄一である。

本稿では、日本の近代化に大きな足跡を残した渋沢栄一の発想と行動を支えたものは一体何で

2020 年 10 月 1 日受理 *名誉教授

あったのかを儒教とサン・シモン主義を主な手掛りにして究明を試みた。

II 渋沢栄一と儒教

1 後期水戸学

渋沢栄一は、1840（天保11）年2月13日、武蔵国^{はんざわぐん}榛沢^ち群^ち血^{あら}洗^{しま}島村（現埼玉県深谷市血洗島）の農民であった父・市郎右衛門（晩香）と母・えいの間にも生まれた。²⁾

栄一は6歳の時から父親に『大学』や『中庸』さらに『論語』の二まで習った。その後7、8歳の時、自宅から7、8町隔たった手計村の尾高惇忠について『小学』・『蒙求』^{もうぎゅう}・四書・五経・『文選』・『佐伝』・『史記』・『漢書』・『十八史略』・『元明史略』・『国史略』・『日本史』・『日本外史』・『日本政記』などを習った。³⁾ 栄一は、尾高惇忠のほかに菊池菊城にも師事したが、尾高や菊池らの草莽の学問は、武士の学問と異なり、学問と農業・商売との両立を唱えるもので、漢籍を実践に即して読むものであった。彼らは水戸学の影響を受けており、「北武・水戸学」と呼んでもよい独特の学問集団を形成していた。そして、この「北武・水戸学」が青年期の栄一を培った。⁴⁾

そもそも水戸学は、徳川光圀の『大日本史』編集に由来し、最初は歴史学であった。この初期水戸学は「水戸史学」と言われることもある。その後、水戸学は徂徠学を中心とした古学の影響を受け、高度な政治学理論となった。この後期水戸学は、「水戸政教学」とも言われ、日本思想研究において断りなく「水戸学」と言う場合は専ら後期水戸学を指している場合が多い。⁵⁾

坂本慎一は、栄一は一生儒教の強い影響下にあったが、栄一の儒学はほぼ正統的な後期水戸学であったと主張する。坂本は、まず先行研究を克明に精査して後期水戸学を評価しないあるいは批判的な言説をあぶり出す。そして、その代表的なものとして土井喬雄（1931年『渋沢栄一伝』1988年『渋沢栄一と人倫思想』）、ジョージ・オーシロ（1990年 Shibusawa Eiichi and Christian Internationalization）、鹿島茂（1999年『サン＝シモン主義者渋沢栄一』）を挙げる。とくに土屋喬雄は、栄一が水戸学を修学した結果、尊皇攘夷思想に傾倒し、高崎城を乗っ取って横浜の異人館を襲撃するという暴挙を計画したことを取り上げ、栄一の暴挙計画は全く以て若気の至りであり、分析の対象にする価値すらないとする。さらに、基本的に尊皇攘夷論を盲説と見なし、栄一の偉大さは暴挙計画のみならず攘夷思想そのものからの潔い脱却にあったとする。⁶⁾ しかし、この見方は後期水戸学と過激な尊皇攘夷論をあまりにも短絡的に結びつけ、尊皇攘夷論とそれに影響を与えた後期水戸学を一緒に否定する「坊主憎けりゃ袈裟まで憎い」式の議論であろう。

また、坂本は丸山眞男が『日本政治思想史研究』において、後期水戸学を幕末の一時期にだけ影響力を持った思想で、「歴史的限界」があったと述べていることを取り上げている。⁷⁾ 丸山の主張はマルクス主義的な歴史解釈で、「国家的独立の責任を最後まで担う者は誰かという決定的な点に立至ると、水戸学に於て典型的に示されている様に封建的支配層以外の国民大衆は忽ち問題の外に放逐されてしまう」のであり、「外船渡来を契機とする幕府権力の弛緩^{もたら}によって齎された国内的分裂と無政府的混乱を克服すべき政治力はついに庶民の間から成長しなかった。王政復古の政治的変革は…激派公卿・下級武士とたかだか庶民の上層部を主たる担い手として行われ

た」⁸⁾として真の民衆による社会改革のみが評価に値するとの態度には、まさに「歴史的限界」があると言わざるをえない。

坂本は、さらに「従来の土屋、鹿島、小野、オーシロによる分析では、渋沢の「近代的」な思想は全て洋行によって西洋から輸入されたものであると解釈されていた」が栄一の「海外万里の国々は巡回したとはいうものの、何一つ学び得たこともなく、空しく目的を失うて帰国したまでの事である」と述べたことを素直に受取り、「むしろ彼の自由主義は、儒教において重視され続けてきた「臣が保つべき主体性」の延長上の議論として理解されるべきである」とする。⁹⁾

坂本は、さらに高須芳次郎（1956年『水戸学派の尊皇および経論』）や小島康敬（1994年『徂徠学と反徂徠』）などの研究を基に、後期水戸学が徂徠学を中心とした古学の影響を受けたことは明白であると言う。坂本は、古学の中で伊藤仁齋を批判的に受け継ぎ高度な儒教理論を形成し、修身論よりも経世論を重視した荻生徂徠を高く評価する。そして栄一思想は徂徠学・水戸学の系譜上にあり、経世論重視の学統にあると言う。¹⁰⁾ さらに後期水戸学について坂本は、「渋沢が専ら影響を受けた藤田東湖…渋沢は会沢正志齋も読んでいたが、渋沢自身は両者の相違にほとんど頓着した形跡はない」、あるいは、「渋沢も心酔した会沢正志齋の『新論』…」と述べる通り、この二人から大きな影響を受けたとする。東湖が政治の基本を民を安んずることと考えたこと、また正志齋が『新論』で富国強兵を議論し、邦国を富ますことの重要性を説いていることを挙げ、ここに水戸学の実学主義・行動重視の発想が見られるとしている。¹¹⁾ その一方で、水戸学が徂徠学の「国君」が日本の場合は天皇であることを明確にし、その具体化によって天皇制のための儒学的社会論を志向したとして、東湖の『弘道館記述義』にある「夫れ儒教は、斯道を培ふ所以、苟しくもその書を読む者は、誠によろしく周・孔の本意を体し、明論・正名の大義に資りて、以て神皇の道を光隆すべし」¹²⁾ や『常陸帯』にある「さて斯く邪なる教のはびこれる故由を思ふに神の道衰へて大和魂失せぬればなり。譬へば人の元氣衰へぬれば外邪是に入つて病をなすが如し。神の道は大和魂の本にて、皇国の元氣なり。されば其元氣を本とし、風土の似よりたる漢土の教を取りて大和魂を助け、忠孝の大筋明らかならしむ」（水戸学大系第1巻360～361ページ）を挙げる。坂本は東湖が「日本人の精神の根本は大和魂でなければならない」と主張していると言う。¹³⁾

こうした坂本の議論を批判的に継承したのが中野剛志である。中野は、仁齋や徂徠の古学とその影響を受けた後期水戸学をプラグマティズムとナショナリズムの思想であると分析する。そして、このプラグマティズムとナショナリズムこそが栄一思想そのものであると言う。¹⁴⁾ 中野は古学では栄一思想に近いのは徂徠より仁齋であるとする。なぜなら、仁齋は孔子の説いた聖人の「道」とは「人倫日用正に行くべきの路」¹⁵⁾（語孟字義）で、日常の生活世界における実践が大切なこと、また「卑近の中、自ずから高遠の理有るなり」¹⁶⁾（童子問）であり日常の生活経験によって育まれた常識の中にこそ、深遠な真理が含まれているとしているからである。中野によれば、仁齋は論語を朱子学とは逆に反合理主義の教えと受けとめ、「常識」を重視する書と考えたのである。仁齋は論語を「最上至極宇宙第一の書」と呼んで憚らなかつたが、常識というものは、不思議なことに、時と場所と状況を問わず応用でき、環境の変化にも対応できる柔軟性を有しながら、なお一貫性をもった確かな行動規準として働くものであり、常識にのっとり臨機応

変に発想し行動することこそプラグマティズムということになる。栄一は論語を仁齋のように読んでいたのである。¹⁷⁾なぜなら、栄一は「いま論語の説く所はことごとく人間実際の生活を離れず、名教と実用と一致合同しておるが、宋儒程子や朱子の解釈は高遠の理学に馳せ、やや実際の行事に遠ざかるに至れり。我が邦の儒家藤原惺窩・林羅山のごとき、宋儒の弊を承けて学問と實際とを別物視し、物徂徠に至っては学問は士大夫以上の修むべきものなりと明言して、農工商の実業家をば圏外に排斥したりき」¹⁸⁾と述べて、朱子学のみならず、徂徠をも厳しく批判しているからである。また、中野は栄一のナショナリズムもその発端はすべて仁齋に見られると言う。仁齋は、仁義の政治が行われるところでは王朝が長く続くものであるが、日本では神武天皇が建国して以来、皇統は途絶えたことはない。これは中国が及ばない点である（論語古義巻の5～182）と述べているが、この皇統の連続によって日本の優越を説く議論こそ、後に水戸学が最大限強調するところとなり、その尊王論へとつながっていき、栄一にたどり着くことになるのである。¹⁹⁾

後期水戸学の中で、中野は会沢正志齋を高く評価している。なぜなら、正志齋の『新論』と『時務策』こそ後期水戸学のプラグマティズムとナショナリズムを遺憾なく発揮していると考えからである。正志齋は『新論』を1825年に書いているが、この年に幕府は異国船打払令を出している。つまり、『新論』はロシアの度重なる開国・通商要求やイギリスのフェートン号事件（1808年）など迫り来る外敵から日本を守るため、天皇を中心に国民がまとまり「大和魂」を発揮して外国の圧力をはねのけ、同時に国内の政治的・軍事的改革を遂行して国力を充実させ、しかる後積極的開国にうって出るべしと主張した書である。²⁰⁾『新論』は「謹んで按ずるに、神州は太陽の出づる所、元気の始まる所にして、天日之嗣、世辰極を御し、終古易らず。固より大地の元首にして、万国の綱紀なり」²¹⁾で始まるように、日本を神州と呼び世界の中心であると強調する強烈なナショナリズムの書であるが、実際にその内容を見ると、できる限り海外情報を収集して冷静に分析し、日本の持つ弱点を認めた上で、これにいかに対処すべきか極めて知的に論理展開している。そのために国学や神道、兵学、管子さらには蘭学などさまざまな学問分野や学派の考えを受け入れこれをプラグマティックに換骨奪胎して論理構成している。²²⁾

これに対して、たとえば山本七平は「幕末における尊皇思想というのは内容的には学問としてとらえるのが相当困難であり、俗に「水戸学」というが、…後期になると雑学化して「学」としては把握できにくい」²³⁾と述べているし、鹿島茂も「水戸学とはなんであるかという、じつは、これが、学と呼べるような体系性も論理整合性もそなえていない、ある種の過激な気質の結晶のようなものにすぎない」²⁴⁾と述べ後期水戸学に低評価しか与えない。また、子安宣邦は日本のナショナリズムの言説を思想史の中にたどり、『新論』で登場した「国体」の概念が、排他的で優越的な「日本民族」概念を中核とする帝国日本の国家イデオロギーへと発展し、近代日本を支配することとなったと論じている。（子安宣邦『日本ナショナリズムの解説』2007年）²⁵⁾

これらに対して、中野は、吉田俊純の「戦後の学界には、水戸学を研究すること自体が無意味あるいは危険だとする雰囲気があった」との指摘を受けとめた上で、「こうした戦後の先入観を排して『新論』に目を通してみると、そこには極めて洗練された実践哲学に基づき、世界情勢を視野に置いた壮大な国家戦略があることがわかる」し、「卓越した戦略眼、高度な国際感覚、そして知的な論争術が現れてくるのである」²⁶⁾と最大限の評価をしている。中野は、水戸学は典型

的なナショナリズムの思想であり、水戸学を受け継ぐ栄一も当然のことながらナショナリストであると言う。栄一はその家訓に「忠君愛国」を掲げたほど、そのナショナリズムに関しては生涯一貫していた。²⁷⁾ ただし、正志斎のナショナリズムは、本居宣長が『直毘靈』の冒頭から「皇大御国は、掛まくも可畏き神御祖天照大御神の、御生れ坐る大御国にして、…」と述べ「皇大御国」の自己神聖化をはかるような神がかり的なものではない。²⁸⁾ その証拠に、正志斎は古代の神によって創始された道は永遠不滅だとする本居宣長の国学を「天下を死物として、千年万年も質のみにて治められると思ふは紙上の空論」と『読直毘靈』で厳しく批判している。²⁹⁾ また同時に栄一は、水戸学のプラグマティズムを受け継ぎ、「国を富まし国を強くして以て天下を平らかにするに努力した」³⁰⁾ のである。中野は、「近代日本資本主義の基礎を築いた渋沢の偉業は、若き日に水戸学によって点火されたナショナリズムを原動力として達成されたということになる」と結論づけている。³¹⁾

2 論語と算盤

『論語と算盤』は大正5年（1916年）栄一が実業界から引退した76歳の時に刊行されたもので、その冒頭の凡例に「本書題して『論語と算盤』とせしは、…渋沢子爵が、…信条を孔子教に執り、…『論語と算盤』とは必ず合致すべきもの、また合致せしめざる可からざるもの、換言すれば、「仁義と殖利」とは、その根底において必ずしも扞格するものにあらざることを創唱し実践し、身を以て範を垂れ、且つ筆に舌に鼓吹せられつつあるの精髓なり」とあるように、栄一の発想と行動のよりどころとなったもののエッセンスを纏めたものである。³²⁾

栄一は、まず従来、儒者が孔子の説を誤解していたし、その中でもっとも甚だしいのが富貴の觀念貨殖の思想で、彼らの論語解釈では、「仁義王道」と「貨殖富貴」の二者は、氷炭相容れざるものになっていると指摘する。たとえば、論語の中の「富と貴きとはこれ人の欲する所なり。その道をもってせずして、これを得れば去らざるなり」という句を富貴を軽んじたと解釈するのは間違いで、よく見れば富貴を賤しんだところは一つもない。その主旨は富貴に淫するものを誡められたまでで、これをもって、孔子は富貴を厭悪したとするのは誤謬も甚だしい。孔子の言わんと欲する所は、道理を有った富貴でなければ、むしろ貧賤の方がよいが、もし正しい道理を踏んで得た富貴ならあえて差し支えないとの意味に解釈すべきであるとする。³³⁾ 栄一は、さらに自分は平生から「論語と算盤は一致すべきものである」と言っているが、これは孔子が切実に道徳を教示されたのと同時に、経済にも相当の注意を払われたからであるとする。つまり世に立つて政を行うには、政務の要費はもちろん、一般人民の衣食住の必要から、金銭上の関係を生ずることは言うまでもない。結局、国を治め民を済うためには経済と道徳が必要であり、この両者を調和せねばならないことになるからである。³⁴⁾ ここには、論語を経世論として解釈する仁齋・徂徠の古学、正志斎の後期水戸学のプラグマティックな面を引き継いだ栄一らしさが表われている。³⁵⁾

栄一は、最終的に「義理合一」あるいは「義利合一」を唱える³⁶⁾ が、栄一がこの信念を持つにいたる上で大きな影響を及ぼしたのが、陽明学者の三島中洲である。明治41年（1908年）栄一（69歳）は三島中洲から「道徳経済合一説」という小冊子を受け取っている。同年、中洲は講演にお

いて陽明学者らしく「理気合一」、「知行合一」の考えを援用して「研究するときは、道徳は道徳、経済は経済と分けて分析せねばなりません、行うときは、一つになってしまう」。つまり「物の道理を研究しても行う段になって一緒にしなければ役に立たない」として合一説を思いついたと言っている。中洲の言葉を要約すると、「天の道においては、道徳と経済とが合一しており、天の経済を受けて、人の経済、すなわち衣食住がある」ということになる。これを受けて栄一は『論語講義』の中で「余は、平生、論語と算盤説を唱え実業を論語に一致せしめんと企図し、余が尊信する三島中洲先生も同工異曲とでもいうべきか、論語を経済に一致せしめんと説かれ」と述べ、³⁷⁾ さらに中洲の「算盤と論語を一つにして二ならず」の言葉に「先生の経済道徳観至れり尽くせりというべし」と全面的に心酔していることが見てとれる。³⁸⁾

しかし、算盤と論語は本来対立するものであり、これを「一つにして二ならず」と言うのは、弁証法的に止揚 (aufheben) しようとするものであろうが、やや思弁的すぎると思われる。栄一は、「人性人格ある至上者の存在を信ずる必要はない」³⁹⁾ とする「無神論者」であり、孔子の教えはキリスト教の教えのような奇跡が一つもないからキリスト教より良いとする⁴⁰⁾ 合理主義者 (rationalist) でかつ現実主義者 (pragmatist) であることから、「義利合一」のような理想論、抽象論を振り回すより、「儲けてよいが節度を守れ。その節度とは孔子の言う「己所不欲、勿施於人 (己の欲せざる所人に施す勿れ)⁴¹⁾」である」とでも言う方が栄一に似付かわしいのではなからうか。

III 渋沢栄一とサン・シモン主義

1 フランス体験

栄一は、1867年2月15日(旧暦慶応3年1月11日)に日本を出発して、1868年(明治元年)12月16日に帰国するまでの2年足らずの期間フランスに滞在した。またその間スイス、オランダ、ベルギー、イタリア、イギリスを訪問している。

栄一はフランスに渡る前、縁あって一橋家に仕官したが、徳川幕府が潰れるのは時間の問題でこのまま困窮しては亡国の臣になるのは必然と悶々としていたところ、水戸の民部公子徳川昭武の御供の一人としてフランスに行くことになったのである。栄一は、この時の気持ちを「降ってきたような話、自分がその時の嬉しさは実に何とも譬うるに物がなかった」と表現している。⁴²⁾ さらに「さていよいよ外国へゆくと決した以上は、これまで攘夷論を主張して外国はすべて夷狄禽獣であると軽蔑して居たが、この時には早く外国の言語を覚え外国の書物が読めるようにならなくちゃいけないと思った。その上、自分も京都で歩兵組立の事を思い立ってその事に関係してからは、兵制とか医学とか、また船舶、器械とかいうことはとうてい外国には叶わぬという考えが起こって、何でもそちらの好い処を取りたいという念慮が生じて居ったから、船中から専心に仏語の稽古をはじめ、彼の文法書などの教授を受けた」⁴³⁾ として、あっという間に開国派に転じて澄ましている。プラグマティスト栄一の面目躍如である。この後、栄一は滞仏中にさまざまの事を海綿が水を吸うように吸収するが、そのやる気と好奇心の旺盛さは出発時から表われていたのである。

鹿島茂によれば、栄一はマルセイユで一行を迎えた名誉総領事の銀行家フリュリ＝エラル（Flury = Hérard）（栄一の記述ではフロリヘラルド）を先生にして株式会社の仕組みからありとあらゆる金融システムについて学んだ。ところが、栄一が学んだフランスの社会・経済システムは、1851年のルイ・ナポレオンのクーデターによって誕生したナポレオン三世の治下つまり第二帝政期に初めて実現したものであった。この社会・経済システムは、ナポレオン三世のブレーンとなった銀行家のペレール兄弟や経済学者のミシェル・シュヴァリエなどのサン・シモン主義者たちがシステムティックに、しかも短期間のうちに実行し完成させたものであった。⁴⁴⁾

サン・シモン主義（Saint-Simonisme/ Saint-Simonism）とは、サン・シモン伯爵（Claude-Henri de Saint-Simon, comte de Saint-Simon）が唱導した社会理論で、社会の富の根源は生産にあり、王侯貴族・官吏・軍人などの生産にかかわらない人間は社会に不要であるから、極力排除すべきで、産業人優先の社会を築くべきだとする思想である。そのキー・ワードは富の「流通・循環」にある。サン・シモン伯爵は、自分の思想が実践に移される前に死去したので、彼の意思は、サン＝タマン・バザールとプロスペル・アンファンタンらの高弟、すなわちサン・シモン主義者たちに受け継がれたのである。彼らは、晩年「新キリスト教」を唱えた師にならって「サン・シモン教会」を組織した。彼らは機関紙『産業人』を、ついで『グローブ』を発行して社会改良の方法を次々に提案していった。彼らの主張の力点は第一にカネを動かす銀行と株式会社を設立しやすくする法律をつくり、政治によってこれをフル稼働させることであり、なかでも銀行はサン・シモン主義の中核として位置付けられた。この銀行は産業投資型で、資金は民間から小口預金で集める。第二は、モノとヒトの流通・循環を加速する鉄道・港湾・船舶の整備である。これらのインフラ整備には莫大な資金が必要となるため、株式や社債による直接金融を実施する。さらに、これらの証券の流通を促すため証券取引所を整備する。第三はアイデアの流通を促すために万国博覧会を開催することであった。⁴⁵⁾

ところが、その後「サン・シモン教会」はアンファンタンの主流派とバザールらの反主流派の間で対立が起き、教会は解体してしまう。ナポレオン三世の下で大活躍するのは、反主流派の方である。その中でもっとも活躍したのが、ペレール兄弟と経済学者のミシェル・シュヴァリエである。彼らはナポレオン三世のブレーンとなってサン・シモン主義的な社会改造を矢継ぎ早に実施していった。なかでもペレール兄弟はフランス初の起業銀行（banque d'affaires）クレディ・モビリエ（Crédit Mobilier）を設立して、鉄道建設を中心に積極的な投資事業を行い、わずか数年のうちにフランス経済は劇的な成長を見せ、一気にイギリスを抜き去ることになった。またナポレオン三世によって登用された剛腕のセーヌ県知事オスマンの主導によって行われたパリ大改造は、空前の不動産ブームをまき起し、さらに、ミシェル・シュヴァリエの唱導により1855年に開催された万国博覧会は産業構造の劇的変容をもたらし、農業国だったフランスはイギリスやアメリカと並ぶ工業国へと変身したのである。栄一が見たのはまさにその時のフランスだったのである。鹿島は、産業社会の基礎造りのために開催された万国博覧会に、偶然、徳川昭武の随員として参加した栄一が、当時、文字通り、唸りをあげながら稼働していたサン・シモン主義的社会改造の仕組みを「そうとは知らず」に学び取ったと述べている。⁴⁶⁾

ところで、栄一のフランスにおける師匠であるフリュリ＝エラルがサン・シモン主義と関係

があるかどうかは資料が少なく謎であったが、鹿島の綿密な調査によって、フリュリ＝エラール銀行はペレール系ではなく、「ソシエテ・ジェネラル (Société Générale) 系であることがわかった。そして、「ソシエテ・ジェネラル」は「サン・シモン教会」の主流派の代表者アンファンタンの系譜に属する銀行家や産業人によって設立されたことが判明した。結局フリュリ＝エラールはペレール兄弟とは別の流れではあるもののこちらもサン・シモン主義の銀行であることがわかったのである。⁴⁷⁾

栄一はフランス滞在中にさまざまな体験をするが、フランス到着前に、まずスエズで驚くべき光景を目の当たりにする。それは後に「スエズ運河」と呼ばれる大運河の建設工事であった。栄一は「私は其の工事の大規模であることよりも、寧ろ泰西人が独り一身一為のためのみならず、国家を超越して、進んで斯くの如き規模の遠大にして目途の壮大なる大計画を実行する点に感服せざるを得なかった」(青淵回顧録)と述べ、西洋と東洋を結ぶという国を超えた大きな利益のために工事が行われていることに驚いている。⁴⁸⁾ 鹿島によれば、世界全人類のためにスエズ運河を開削しようというアイディアは、1830年頃「サン・シモン教団」によって打ち出されており、エジプトのパシャに運河の開削工事をもちかけたが、この話は流れてしまった。そこでサン・シモン主義者たちの計画をパシャに橋渡しした当時のカイロ領事フェルディナン・ド・レセップスが自分でスエズ運河会社を起こして1869年について大事業を完成させたのである。つまり、栄一は大工事の裏にあるサン・シモン主義者たちのアイディアに「そうとは知らず」感服したことになる。⁴⁹⁾

1867年6月20日民部公子一行は万国博覧会を見学した。栄一は蒸気機関などの素晴らしい最新技術の展示を見て、「我輩其^{その}学に達せざれば其^{その}理を推究する能はず雲烟過眼に看了すること遺憾といふべし」(航西日記)と述べて、技術の理論・内容を理解できないことを残念がっている。また、展示されている各国の計り器具や貨幣について、「尺度量衡も各国現に用ふる所を聚めて列せり」さらに「貨幣は万国交通の本質なれば、各国其制を異にするには四海一家の誼^{よしみ}に於て欠典^{てん}なれば」「之を同規一致に帰せしむること至便の念を生せしめ」(航西日記)るとし、度量衡と貨幣の各国の共通化が大事であることを見抜いている。⁵⁰⁾

また、万博がフランスで Le Temps 紙によって大きく報じられたことで新聞というものの存在を知った栄一はこれを大変便利なものと考えた。⁵¹⁾

万国博覧会の後、一行はヨーロッパ各国を歴訪したが、中でも、ベルギーで国王レオポルドII世は晩餐会の席で民部公子に「これからの世界は鉄の世界である。従って製鉄事業の盛んな国は必ず富み栄えると信ずる。(中略)日本をして強く且つ富める国にするには、どうしても鉄を多く用ゐる国としなければならぬ。幸ひ貴下は将来日本に於いて重要な地位に就く方であるから、よく比の点を御記憶なさるが可いと思ふ。猶ほ日本が将来鉄を盛んに用ゐるやうになったなら、生産が豊富にあり、品質も良好であるから、是非我が国の物を用ゐるやうにせられたい」(青淵回顧録)と述べた。これを聞いた栄一は、国王が率先して自国の製品の売り込みを図っていることに大いに驚くと同時に感心している。⁵²⁾

栄一たちが初めて汽車に乗ったのはスエズからアレキサンドリアで、地中海の船に乗り換えるまでであった。その後マルセイユからパリまでまた汽車で行ったが、栄一は「国家はこのよう

交通機関を持たないと発展しない」と感じたが、その後訪問したイタリアに入るのに鉄道が開通しておらず難儀したことを記し、かつ後にイギリスに行った時、その整備されているさまに感心している。⁵³⁾

そのほかに栄一の印象に残ったことは、「民部公子の教育監督ビレット氏は政府の役人であり、コンセル・ゼネラルを依頼したフロリヘラルド氏は銀行家で純然たる民間の人であるが、此の二人の交際ぶりを見るに全く対等の交わりであって、階級的観念は微塵もなく、頗るよく調和して居る。日本でも斯くありたいものだとつくづく感じたのだった」（青淵回顧録）と記しているように、ヴィレットとフリュリ＝エラルとの間にある官・民平等の意識であった。⁵⁴⁾

では、栄一にとって一番重要な発見は何であったか。その答えは「合本組織」すなわち株式会社という制度であった。栄一は「仏蘭西での留学は、遺憾ながら水泡となって帰朝したが、約二ヶ年仏蘭西に滞在した間、またその間英吉利、伊太利、白耳義、和蘭、瑞西等を巡遊した時に、最も感じたのは、事業が合本組織で非常に発展して居ることと、官民の接触する有様が頗る親密であることであって、一面からは合本組織で商工業が発達すれば自然商工業者の地位が上って官民の間が接近してくるであらうと思った」（竜門雑誌）と述べている。⁵⁵⁾

また、幕府崩壊の報を受けた栄一は「フロリヘラルド氏の勸に従ってフランスの公債と鉄道株券を買ひ求め、万一の場合の用意として置いた」ところ、「半年後に売った所が政府公債の方は買入れた時と余り値段が変わらなかったが鉄道公債の方は相場が上がって居て、五六百円儲った勘定になりました。此の時に成る程公債と云ふものは経済上便利なものであるとの感想を強くしました」（「本邦公債制度の起源」）と述べているが、この時栄一が強く感じたことは、儲かったうれしさよりも、株式や公債が自由に売買でき、一般市民が小口の資金を投資できることであり、それによって合本組織は成り立ち、繁栄できるということであった。

後年栄一は、「自分の一身上一番効能のあった旅は四十四年前の洋行と思ひます。此の時が銀行を起す事とか公債を発行するとか外国では役人と商人の懸隔が日本の如くでない、是は何とかしなければならぬと云ふ事に気が付いた、是は余程効能のあった事と思ひます」（「本邦公債制度の起源」）と述べている。⁵⁶⁾

2 帰国後の実践

フランスから帰国した栄一は、徳川慶喜が蟄居する静岡藩で、勘定組頭に取り立てられた。栄一は早速、西洋で行われている共力^{きょうりょく}合本法^{がっぽんぽう}を採用することにして、石高拝借金を基礎としてこれに地方の資本を合同させて一個の商会を組立て、興業殖産を発達させようと考えた。こうして明治2年の春「商法会所^{しょうほうかいしょ}」という「あたかも銀行と商業とを混淆したような物」を作り栄一は「頭取」となって陣頭指揮している。⁵⁷⁾ 栄一は後に「此の商法会所は今日で申せば株式会社のやうなもので、静岡藩の借用金と民間の資金とを寄せ集め、所謂合本組織^{がっぽん}として経営する事となったのであるが、恐らく之れが我国に於ける合本組織の会社が出来た嚆矢^{こうし}であると思ふ」（青淵回顧録）と述べている。⁵⁸⁾

栄一は明治2年 11月に政府に呼び出されて大蔵省の租税^{そぜいのしやう}正になった。この時から6年までの4年余の間に「日本の商工業すなわち貨幣制度、銀行条例、会社組織等の事を私が主として取

扱ったが、殊に私の愉快に働いたのは、明治四年の廃藩置県について井上大輔の統轄の下にあって、もとより規律的ではなかったけれども、実に機敏にそれこそ快刀乱麻を断つという活動であった。その利器の一つには私も加入したであろうと思う。この廃藩置県の処分については種々の新制度を行うた。例えば海軍のこと、租税収納の改正、公債の発行、各藩紙幣の兌換等であります。この事はこうしたらよかろうと案を作って出すと即決されるという塩梅で大分賞められた。実に足下は天稟だ、能く勉強もするけれども、かようの新事物は学問のみでは便利せぬとて、井上大輔から激賞された」と誇らしげに述べている。⁵⁹⁾

明治6年5月、栄一は上司である井上馨が辞職するのを好い機会ととらえ、自らも辞職して実業界に身を投じることにした。そして最初に手掛けたのが銀行である。栄一はかねてから「日本の実業界を振興せしむるには、大動脈の働きをなすべき中枢機関の整備を急務とし」、「此の動脈の働きをなすべきものは即ち金融機関」であることを知悉していたから、自らが三井組と小野組に働きかけて銀行を作ろうとした。こうして立ち上がった「第一国立銀行」はしかしながら上手くいかず、明治6年7月に改めて「第一国立銀行」の開業免状を得て、8月1日開業した、「これが我国に於ける国立銀行の嚆矢である」（青淵回顧録）が栄一は「此の銀行の創立に関しては初めから関係して居った事ではあり」、「責任を感じて居ったのであるから、総監役といふ名義で頭取の実務を見、銀行経営の一切の責任を負うこととなった」（青淵回顧録）のである。⁶⁰⁾

銀行以外に栄一は、フランスで証券の保管制度について勉強していた（渋沢倉庫の80年）ので倉庫業の重要性を良く認識しており、明治30年3月30日に渋沢倉庫の前身である渋沢倉庫部を設立している。

また、栄一は、フランスに出発する前から船舶や機械をはじめ日本より進んでいるものは西洋に学ぶべきとの認識を持っていたが、帰国後早速非財閥系の重工業を発展させるため、後の東京石川島造船所、東京製綱、日本鋼管などの設立や運営に深く関与した。

さらに、栄一は、渡欧の際、また滞在中に交通機関の発達が国家発展の基礎となることを良く理解していたので、帰国後、共同運輸会社（後の日本郵船）日本鉄道、北海道炭礦鉄道、九州鉄道、上武鉄道、京阪電気鉄道など多くの交通事業に関与した。

すでに述べたように、栄一は、パリではじめて新聞を知り、ロンドンでタイムズ紙を訪問して新聞の重要さに気付いており、帰国後、東京における最初の日刊紙東京日日新聞や中外物価新報に深く関与した。また、洋紙の将来的な需要を見据えて日本初の洋紙製造業である抄紙会社（後の王子製紙）の創立にリーダーシップを発揮している。

そのほかにも栄一はフランス滞在中またヨーロッパ諸国歴訪中に感心したこと、見習うべきと感じたことを帰国後に次々と実践している。たとえば近代的な病院の必要性に気付いたことが聖路加国際病院への深い関与につながった。また社会福祉事業では、東京養育院が挙げられる。栄一は生涯に亘り（58年間）院長を務めた。また社交については、東京商工会議所や日本工業倶楽部などの設立に関与した。さらに文化面では、栄一が創立委員長になって帝国劇場を立ち上げている。このように見てくると、栄一の活動や事業にはフランスおよびヨーロッパ諸国での体験が大きく影響していることがわかる。⁶¹⁾

IV 渋沢イズム

1 本質をつかむ直観力

渋沢栄一の発想と行動を支えたものは一体何であったのかについて、以前よりさまざまな議論が交わされてきた。その一つがすでに紹介した坂本慎一や中野剛志などの「儒教」とする説であり、もう一方が鹿島茂に代表される「サン・シモン主義」とする説である。さらにパトリック・フリデンソンによる「儒教、サン・シモン主義融合説」⁶²⁾ などがある。これほどさまざまな説が出てくるのは一見すると栄一の考えと行動がしばしば豹変しているように見えるからであり、鹿島茂の「まったく、渋沢栄一というこの男、理想主義者か現実主義者か、原則論者か日和見主義者かという我々の二元論的問題設定を根底から無意味なものにしてしまう、まことに不思議な人物というほかない」という嘆息めいた呟きもわからないではない。

しかし、栄一の発想と行動を生涯を通して見ると、「外国の脅威から日本を守るためには軍事を強化して防衛力を高める必要がある。そのためには産業を興し経済力を高め国を豊かにする必要がある」⁶³⁾ これを成し遂げるには天皇を中心に国民が一致団結することが不可欠である。自分は日本がそうなれるように一臣民として生涯国に奉仕するつもりである。⁶⁴⁾ そのためには、良いと思ったことは日本のものであれ外国のものであれ、前例や慣習、偏見を捨てて何んでも取り込み実行に移す」という考えは、終生変わらなかった。強烈なナショナリストであり、希代のプラグマティストであった栄一も、よく見るとその軸はぶれていない。

たしかに、栄一は「余は孔夫子の説かれた論語によって、常に一身を処し進退去就を決する標準と致している」⁶⁵⁾ がそれは自分には「仏教の知識なく耶蘇教に至ってはさらに知る所がない。そこで…儒教ならば不十分ながら幼少の時より親しんできた関係があり…特に論語は…これに依拠しさえすれば、人の人たる道に悖らず…必ず^{あやま}過ちを免るるに至らんと確^{かた}信じ」⁶⁶⁾ ていたからだと述べている。

しかし、栄一の発想と行動を見ると、論語をプラグマティックに解釈したぐらいでは及ばない「幅広き」と「ユニークさ」を感じる。それは儒教やサン・シモン主義を超越した「渋沢イズム」とでも言うべきものであろう。鹿島茂は「つくづく、この人はやはり天才だったんだなあとすることがある。なんの天才かという、ある現象なり事件を前にしたとき、すべての夾雑物を取り除いて、一気にその核心を衝く帰納的能力の天才、見えざるシステムを見抜く天才である」⁶⁷⁾ と述べているが、まったく同感である。

では栄一はなぜ儒教、中でも論語にこだわったのであろうか。それは栄一には外国語（フランス語や英語）の能力が乏しく、また時間的余裕もなく、ヨーロッパの哲学や経済学、社会学などを研究できなかったためであろうと推察できる。つまり栄一が直観でたどり着いた本質ないし核心部分をみんなに理解させる「言語」が栄一にとっては儒教とくに論語しかなかったというのが本当のところであろう。

2 道德観

栄一は「道德経済合一説」もしくは「義利合一説」を主張したことは良く知られているが、アダム・スミスの思想にも共通点を認めている。1923年（栄一83歳）にレコード録音した講話「道德経済合一説」の中で、栄一は「聞くところによれば、経済学の祖・英人アダム・スミスは、グラスゴー大学の倫理哲学教授であって、同情主義の倫理学を起し、次いで有名なる『国富論』を著して、近世経済学を起したということであるが、これいわゆる先聖後聖その撰を一にするものである。利義合一〔道德経済合一〕は、東西両洋に通ずる不易の原理であると信じます」と述べている。田中一弘は「確かに両者の思想には特徴的な共通点が見られる。第一に、彼らは人の自利心を肯定的に捉え、個人の自己利益の追求が社会全体の繁栄に重要な役割を果たすことを強調している。第二に、しかし彼らは、そうした自利心を無制限に容認するのではなく、道德に制限された自利心をこそ肯定した」と述べている。⁶⁸⁾ではなぜ道德に制限された自利心でなければならないのかという点に関して、田中は、栄一の真意は「道德を守ると儲かるから、道德を守るべし」ではなく、「道德は守るべきものだから守るべし」であるからと言う。この感覚は、カントを想起させる。カントは『道德形而上学原論』の中で、「第一に、およそ道德的概念は、すべてその起源と所在とを、まったくア・プリオリに理性のなかにもっている。…第二に、道德的概念は、経験的認識から、従ってまた偶然的な認識から抽象され得るものではない」(…alle sittliche Begriffe völlig a priori in der Vernunft ihren Sitz und Ursprung haben, …sie von keinem empirischen und darum bloß zufälligen Erkenntnisse abstrahiert werden können)と言っている。⁶⁹⁾つまり、まともな人間であれば、国や人種、宗教を超えて誰でも直観的に「人として何をなすべきか、また何をなさざるべきか」分かる理性を持っているはずだということであろう。栄一もこの感覚があったようで、「帰一協会」への関与がそのことを物語っている。「帰一協会」は異なる宗教が相互理解と協力を推進して「堅実なる思潮を作りて一国の文明に資す」ことを目的として明治45年(1912)に設立されている。そもそもは、「明治44年夏成瀬仁蔵さんが発起して之を渋沢子爵と先代の森村市左衛門男爵に話されたのが始まり」とされている。中心メンバーの一人成瀬仁蔵は「…宗教合一とは考へないが、他の人と違って宗教にも道德にも色々ある、…然しその根本は一つである」(姉崎政治談話筆記)との考えを持っていたし、栄一自身も「自分一人の理想としては神、仏、儒教の別なく、それ等を統一した所の大宗教が出ればよいと希望して居る。言ふまでもなく宗教と謂はれる位のものなら、其の窮極の道理は一つであるから、此等を統一した宗教は出来ぬといふこともあるまい」(青淵百話)と考えていたことがわかる。⁷⁰⁾

V おわりに

渋沢栄一は、幕末から昭和の初めというまさに激動の時代をずば抜けた直観力と行動力で駆け抜けた人物と言える。栄一は経済を盛んにして国を豊かにし、それでもって国を強くするために必要なことを実体験や耳学問から即座に見抜き、たとえばヨーロッパの進んだモノや制度を日本にとり込み、最終的に約500もの企業の設立や運営に関与し、結果として彼の人生の目標であった日本の「富国強兵」「殖産興業」化に大いに寄与したのである。しかし、経済的に貢献したと

いう点なら、むしろ三菱財閥や三井財閥の方が上であったかも知れない。それは三菱の総師であった岩崎久弥と岩崎弥之助、それに三井の総師であった三井八郎右衛門が1896年に男爵に叙されたのに対して、栄一は4年後の1900年に男爵に叙されたことにも表われている。⁷¹⁾しかし、栄一はその後1920年（大正9年）実業家としては異例の子爵に叙されたのである。これは栄一が一生強調しつづけた「道徳的に行い」の成果である数々の福祉・社会事業に対する世間の高い評価の結果である。

栄一は生涯自分の発想と行動を支えるものは論語をはじめとする儒教であると言い続けた。栄一は、モノや制度など「形而下」のことには極めてプラグマティックに取り込んだが、「形而上」のこと、つまり精神面では保守的で、幕末に皇王攘夷思想に熱くなっていた頃とあまり変わらなかったように見える。その現れの一つが、主君徳川慶喜公の「当時の御様が如何にも同情に堪えぬ、…せめては其事業を明瞭にして、逆賊と誣ひられ怯懦と罵られた汚名が、後年に於て洗い浄められるやうにして上げたい⁷²⁾」との一心で、私財を投じて浩瀚な『徳川慶喜公伝』を刊行（大正六年）したことに現れている。また晩年の1904年、前年に罹患したインフルエンザが悪化して肺炎などになって臥せていたが同年6月9日、明治天皇から見舞いとして菓子一折を賜った。その時、栄一は床上に起き直り、礼服を取り寄せて天恩を拝謝し、しばし感涙にむせんだというエピソードが残っているように生涯天皇に対する尊崇の念を強く持っていたのである。⁷³⁾

こうした自分の発想と行動のすべてをヨーロッパの学問をしていないせいもあって、論語を含む儒教で説明しようとした栄一に対して福沢諭吉は、まったく別の道を選んでいる。福沢は1835年（天保5年）生れで栄一より5歳上で1901年に死去しているの、栄一とは、同じ「時代精神」(Zeitgeist)の中で生きたはずである。しかし、福沢は幼少期にたたく込まれた漢学をあっさり捨て、蘭学そしてやがて英学へと進む。福沢は『福翁自伝』で「私はただ漢学が不信仰で、漢学に重きをおかぬばかりでない、一步を進めていわゆる腐儒の腐説を一掃してやろうと若い時から心掛けました⁷⁴⁾」と言い、『文明論の概略』で「其学流の道を政治に施すの一事に就ても大なる差支あり。元来孔孟の本説は修心倫常の道なり」「孔孟の道を政に施してよく天下を治めたる者なきを以て徴す可し⁷⁵⁾」と儒教を徹底的に批判した。福沢によれば、西洋文明は、現在の人類の生活上、もっとも快適であり、人々の智恵や徳性の点でも高尚である。文物も発達し、自主自由の権もいきとどいている。この至善至美の文明を目標にして進むことが肝要である。そして西洋文明の全面的摂取による日本人の精神革命を期待したのである。福沢は、人類は野蛮→半開→文明という方向で進歩していくとする進歩史観の持ち主であったが、⁷⁶⁾この点で栄一と大いに異なる。元来保守主義者である栄一は、こうした進歩史観に基く日本人の精神革命は危険だと直観的に悟っていたと推察される。

栄一は、日本の激動期に生き、独特の発想と行動力をもって日本の近代化、富国化の礎作りに大いに貢献した。その原動力はまさしく「渋沢イズム」と呼ぶべきものであったと言えよう。

注

1) 鹿島茂（2013）：渋沢栄一上算盤篇、文芸春秋、17

- 坂本慎一 (2002) : 渋沢栄一の経世済民思想、日本経済評論社、1
 中野剛志 (2020) : 日本経済学新論、筑摩書房、31
- 2) 宮本又郎 (2016) : 渋沢栄一、PHP 研究所、17
 - 3) 渋沢栄一 (1984) : 雨夜譚、岩波書店、16—17
 - 4) 中野剛志 (2020) : 前掲、34
 - 5) 坂本慎一 (2002) : 前掲、23
 - 6) 同上、4 - 6
 - 7) 同上、8
 - 8) 丸山眞男 (1952) : 日本政治思想史研究、東京大学出版会、360 - 362
 - 9) 坂本慎一 (2002) : 前掲、15
 - 10) 同上、23—26
 - 11) 同上、36 - 40
 - 12) 藤田東湖 (1973) : 弘道館記述義 (日本政治思想大系 53 水戸学、岩波書店)、286
 - 13) 坂本慎一 (2002) : 前掲、43 - 44
 - 14) 中野剛志 (2020) : 前掲、42, 46
 - 15) 伊藤仁齋 (1971) : 語孟字義 (日本思想大系 33 伊藤仁齋伊藤東涯、岩波書店)、27
 - 16) 伊藤仁齋 (1970) : 童子問、岩波書店、48
 - 17) 中野剛志 (2020) : 前掲、37 - 39
 - 18) 渋沢栄一 (1977) : 論語講義 (一)、講談社、22
 - 19) 中野剛志 (2012) : 日本思想史新論、筑摩書房、100
 - 20) 同上、25 - 35
 - 21) 会沢正志齋 (1973) : 新論 (日本思想大系 53 水戸学)、岩波書店、50
 - 22) 中野剛志 (2012) : 前掲、33 - 42
 - 23) 山本七平 (2009) : 渋沢栄一近代の創造、祥伝社、120
 - 24) 鹿島茂 (2013) : 前掲、63
 - 25) 中野剛志 (2012) : 前掲、37
 - 26) 同上、37, 42
 - 27) 中野剛志 (2020) : 前掲、46
 - 28) 子安宣邦 (2001) : 本居宣長、岩波書店、30 - 31
 - 29) 中野剛志 (2012) : 前掲、158
 - 30) 渋沢栄一 (1977) : 前掲 (一)、23
 - 31) 中野剛志 (2020) : 前掲、47
 - 32) 渋沢栄一 (2008) : 論語と算盤、KADOKAWA、8
 - 33) 同上、130 - 131
 - 34) 同上、137
 - 35) 中野剛志 (2020) : 前掲、42 - 43
 - 36) 渋沢栄一 (2008) : 前掲、142 - 145
 - 37) 林田明大 (2019) : 渋沢栄一と陽明学、ワニ・プラス、137 - 141
 - 38) 渋沢栄一 (1977) : 論語講義 (二)、講談社、23
 - 39) 渋沢栄一 (1977) : 論語講義 (三)、講談社、79
 - 40) 渋沢栄一 (2008) : 前掲、227 - 228
 - 41) 宇野哲人 (1980) : 論語新釈、講談社、481 - 482
 - 42) 渋沢栄一 (1984) : 前掲、124 - 125
 関水信和 (2018) : 渋沢栄一における欧州滞在の影響、千葉商大論叢、56 - 1、63 - 64
 - 43) 渋沢栄一 (1984) : 前掲、128

- 44) 鹿島茂（2017）：日本の資本主義はどこからきたのか、情報誌 CEL、(115)、26 - 28
- 45) 同上、28 - 29
- 46) 同上、30 - 31
- 47) 同上、30 - 31
- 48) 関水信和（2018）：前掲、66
鹿島茂（2013）：前掲、161
- 49) 同上、162 - 163
- 50) 関水信和（2018）：前掲、77 - 78
- 51) 同上、81
- 52) 同上、84
鹿島茂（2013）：前掲、324 - 325
- 53) 関水信和（2018）：前掲、85
渋沢栄一（2012）：現代語訳渋沢栄一自伝、平凡社、135 - 137
- 54) 鹿島茂（2013）：前掲、310 - 311
- 55) 同上、326
- 56) 関水信和（2018）：前掲、87
- 57) 渋沢栄一（1984）：前掲、163 - 165
- 58) 鹿島茂（2013）：前掲、353
- 59) 渋沢栄一（1984）：前掲、222 - 225
- 60) 関水信和（2018）：前掲、98 - 99
- 61) 同上、100 - 125
- 62) パトリック・フリデンソン（2014）：官民の関係と境界（橘川武郎／パトリック・フリデンソン：グローバル資本主義の中の渋沢栄一、東洋経済新報社所収）、72
フリデンソンは「渋沢はサン・シモン主義者の思想に間接的な影響を受け、複数のサン・モン主義者に出会い、孔子と一八世紀商人であり思想家である石田梅岩への考察とサン・シモン主義の要素を含むフランス思想を融合させることにより、自らの経済思想を構築したと推察するのが無難かもしれない」と述べている。
- 63) 渋沢栄一（1977）：前掲（一）、20
- 64) 同上、142 - 143
- 65) 同上、142
- 66) 同上、20 - 21
- 67) 鹿島茂（2013）：前掲、166
- 68) 田中一弘（2014）：道徳経済合一説（橘川武郎／パトリック・フリデンソン：前掲所収）、55 - 57
- 69) カント（1960）：道徳形而上学原論（篠田英雄訳）、岩波書店、62 - 63
Immanuel Kant（1974）:Kritik der praktischen Vernunft/Grundlegung zur Metaphysik der Sitten, Suhrkamp Taschenbuch Verlag, Frankfurt am Main, 39-40
- 70) 島田昌和（2007）：経営者における道徳と宗教、経営論集（17）（1）、8 - 11
島田によれば、栄一は普遍的な道徳観や倫理要素の抽出をめざしたが、宗教学者や宗教家との溝は大きく、当初の目的を達成することは断念せざるを得なかったようである。
- 71) 宮本又郎（2016）：前掲、162 - 163
- 72) 渋沢栄一（1967）：徳川慶喜公伝1、平凡社（東洋文庫）、18
- 73) 宮本又郎（2016）：前掲、171 - 172
- 74) 福沢諭吉（1978）：新訂福翁自伝、岩波書店、207
- 75) 福沢諭吉（1962）：文明論の概略、岩波書店、81
- 76) 松永昌三（2001）：福沢諭吉と中江兆民、中央公論新社、95、115 - 116

Abstract

The purpose of this paper is to analyze the way of thinking and the behavior of Shibusawa Eiichi , the “Father of Japanese capitalism” , with a consideration of the influences of Confucianism and Saint-Simonism.

Throughout his lifetime , Mr. Shibusawa established and/ or took part in over 500 companies and more than 600 public welfare services such as schools , hospitals, orphanages and so on. The analysis clarified that Mr. Shibusawa was a nationalist who tried to serve his country governed by the emperor in order to make Japan prosperous and strong. Furthermore, it establishes that he was also a pragmatist who interpreted Confucianism, including the Discourses of Confucius, pragmatically and made it a guiding principle for his life. Mr. Shibusawa emphasized the importance of the unity of “the Discourses of Confucius and an abacus” —that is,“ morality and economy”. This unique way of thinking came to be called “Shibusawaism”. Mr. Shibusawa was so highly regarded that he was decorated as a viscount, a truly exceptional honor among businessmen.

Keywords: Confucianism, Saint-Simonism, nationalist, pragmatist